

【翻訳】

プロクロス『摂理をめぐる十のアポリアについて』訳注 (I)

新プラトン主義文献翻訳研究会関西部会

以下に訳出したのは、プロクロスの『三つの小品』の最初の論文である『摂理をめぐる十のアポリアについて』である。プロクロスのギリシア語原文は失われてしまったが、ムールベルケのグイレルムスによるラテン語の翻訳が残されており、またイサーキオス・セバストラートルによるギリシア語の翻案もわれわれは手にすることができる。翻訳に際して用いられたテキストは、この二つが収録されている、Proclus, *Trois études sur la providence I: Dix problèmes concernant la providence, texte établi et traduit par Daniel Isaac*, Paris, Les belles lettres, 1977 である。また翻訳に際しては、ドイツ語訳 (Proklos Diadochos, *Zehn Aporien über die Vorsehung, Frage 1-5 (§§ 1-31)*, übersetzt und erklärt von Klaus Feldbusch, 1972) とイタリア語訳 (Proclo, *Tria Opuscula: Provvidenza, Libertà, Introduzione, traduzione, note e apparati di Francesco D. Paparella*, Milano, 2004) とを参照した¹。

訳文中のかっこの使い分けは以下のとおりである。

- () : ラテン語原文にあるもの、あるいは訳文を読みやすくするためのもの
- : ギリシア語をラテン語で音写したもので、ラテン語原文で用いられているもの
- : 訳者による補い
- ◇ : 特定の語句の強調

プロクロス『摂理をめぐる十のアポリアについて』

[1] 偉大なるプラトンは、『法律』第十卷²において、いわば綱の議論によって、摂理が存在するとわれわれに認めさせた。そして多くの別の箇所において、例えば『ティマイオス』においてもそうだが³、創造の業が、彼の言葉を文字通り引けば、神の摂理のゆえに末端に至るまで入念に仕上げられていることを示した。しかるにプラトンが証明したことと、プラトンの証明を最も効果的に証し立てる神託とによって説得されたわれわれは、——というのも実際、多くの人びとの知性にとって、万物が摂理に従って存在しうることを受け入れるのに妨げとなる一切の妄想を追い払うために、神託のこの伝統を、神々の言葉を聞くのにふさわしい人々にとって、摂理の最も明白な証明であると私は考える。——人々が恥ずべきことをまくしたてている限り、物事の真理に引き戻さなければならぬ。これらの事柄が、われわれの先人たちによってそれほど顧慮に値しないと判断されたからではなくて⁴、数えきれないほどアポリアにふされ分析されてはきたけれども、単にそれらについての話を外から受け取るのを望むからのみならず、魂がこれらについて語

り、聞くこと、そして自分自身に還帰することを欲するから、つまり言わば自分自身と議論するのを望むからである。

さあ、それゆえ、よいと思われるならわれわれ自身に問い、魂の秘奥において尋ね求め、われわれ自身を諸問題の解決において鍛えることを試みよう、つまり、以前の人々によって語られていたとしても、いないとしても、区別をつけずに、われわれが手をつけてみることにしよう。というのも、われわれ自身に正しいと思えることを語る限り、これらのことを語るにしても、かつ書くにしても、われわれ自身の見解と思われるだろうし、とりわけ、共通観念の教示に先立つ先取〔的認識〕をすべての魂に植え付けると言われている、共通のヘルメスを導者として有しているのだから。

第1 アポリア

[2] もしすべてのものに、全体をなすものにも部分にもそして天や天の下にあるものどもの最も個的なものにいたるまで、永遠のものにも可滅的なものにも、摂理に関わるのであれば、そして配慮されるものの価値を摂理が認識しなければならないのであれば（さもなければすべてのものを価値に即して導くことはないだろう、その価値を知らないのだから）、どのようにして摂理はすべてを、全体と部分を、消滅するものと永遠のものとを、認識するのだろうか、またその認識の様態はどのようなものなのかを、他に先だって探求することにしよう。もしわれわれがこれを把握したならば、続けて他の第二のことを、さらに第三のことを問題としよう。

[3] そこでまずわれわれ自身に対してこのことを提出するに際し、共通のヘルメスに呼びかけて、次のように言おう。まず認識には、非理性性と同根の、感覚あるいは表象と呼ばれるものがあると考えられる。これらはどちらも完全に個別的なものに関わり、物体の外に出ることがない。このことは、それらの認識が個別的なものに属することを明らかにしている。他方、臆見や知識と呼ばれる、理性的生命に本質的に内在する認識は、普遍的なことがらを認識するが、——言われたように——単に個別的な性質のみを受容する非理性的な認識と異なっている。しかし〔前者は〕互いに異なっている、動くものに関わる認識、つまり臆見と、常に静止し変化しえないものに関わる認識、つまり知識であるという点で。そしてさらに、これらに先立つ知性的と言われる別の認識があり、ある場合には同時にすべてのものを端的に認識し、ある場合には一つずつすべてにものを認識する。まさに以上により、一方はあらゆる仕方で完全な知性の認識であり、他方は個別的知性の認識であるという点で異なる。というのも、すべてはすべてを知性認識し、この点で理性的認識を超えているが、一方はホリコースに〔*olikos*〕（つまり全体的なありかたで）すべてのものであり、かつすべてのものを知性認識するが、しかし他方は個別的にすべてのものであり、かつすべてのものを知性認識する。なぜならそれぞれがそうであるように、何であれそれをまた知性認識し、そして知性認識するように、またそうであるのだから。

[4] これらすべての認識を越えるのが、摂理の認識である。それは知性を越えて、一のみによってある。この一によって知性認識するのに先立つ働きに身を置きつつそれぞれの神が在り、すべてのものに摂理を及ぼすと言われている。したがって、それに即して摂理が存立している、この一によって摂理は全てを認識する。というのもじっさい、そもそも認識なるものが存立する

ものと永遠に本性を同じくするのが必然であるならば——たとえば、表象や感覚は非理性的生命に属するものだから、それら自体もまた非理性的なものとして措定されねばならない。そしてそれらに先立つ認識は、理性的魂に属する限り理性的であり、知性に属するものは知性的でなければならぬ——神々の認識も、神々である限りにおいて、共通の観念が神的なものを知性より優れたものだとし、かつそれぞれがそう在るように、そのようにまた認識するのだとしているからには、一なる在り方に即して規定されないことは不適切であるから。それゆえもし、摂理が一に即して語られているものであり、かつすべてに善を与えるならば、しかるに善は一と同一で、その在り方によってすべてに摂理を及ぼし、その在り方において摂理を及ぼすものを認識するのであれば、摂理は一によってすべてを認識することができる。しかるにこれは以下のことと同じである。つまり、全体的なものに劣らず部分的なものに摂理を及ぼし、本性に即しているものに劣らず本性に反しているものにも摂理を及ぼし、形相にも形相のないものにも摂理を及ぼすのである。というのもじっさい、すべての可感的なものに対して、分割されえない、何か判断するものがなければならず、また可感的なものに先立つ形相に対して、それら形相を判別する何かがないように——というのも、ある人が言うように、もし別のものが別のものを「識別するの」であれば、それはあたかも私がこれを、あなたがそれを感覚しているのと同じようになってしまう——そのように、普遍的なものにも個的なものにも関わる一つの認識を有する、形相に先立つ何らかのものがなければならぬ。さもなければ、それはいかにして、一方を分有するものとして、また他方を分有されるものとして、秩序づけるのだろうか？ しかるにこれらは一以外には共通のものは何もない。それゆえ形相を知る前に、すべてのものを一として知るものがある。しかるにそれが一に即して知ることは明らかである、似たものは似たものによって知られる限り。例えば、原因は原因づけられたものを知るように。というのも、どこにでも、またこれらすべてのうちに、一があるから。そして任意の仕方であるあらゆる有が普遍的なものではない、いやしくもあるものは普遍的であり、あるものは部分的なものである以上は。そしてまたすべてが形相であるわけでもなく、形相ではないあるものがある。そしてすべてが本性に即しているものでもない、本性に反するものもあるから。ところが何であれ理解されうるそれぞれのものは一つである、一が確かに全てのものに及んでいる限りにおいては。しかるにもしあるものが一を分有しなければ、それは全く有ではないだろうし、摂理に与りえないだろう。それゆえ何も一を逃れないならば、またもしあるものがそれ自身によって⁵すべてを認識するのであれば、統一的に認識するであろう。というのも認識するのは一によるか一によらないかであるが、後者はより劣った仕方であることであり、一によるのとは無縁な仕方である。それゆえ、認識するものはいかなる仕方であれ一であるすべてのものを一によって認識する。それゆえ、もしあるものがすべてを認識するならば、一によってすべてを認識するだろう。というのも一こそ有るものであれ、有らぬものであれ、すべてに共通だから。

[5] それゆえ摂理は、語られたように、一と善とに即して規定され、そして善は知性に先立って存在するから（なぜなら知性が善を、というのもじっさいあらゆる存在者が善を欲求するのであって、善が知性を欲求するのではないから）、摂理的認識が知性的認識を越えているのは必然である。したがって、摂理は自身に固有なものである一によって——そしてこの一によって摂理はすべてを善くするのだが——善はすべてを認識することも必然である。知性的なものであれ、非

知性的なものであれ、生きているものであれ、生きていないものであれ、有るものであれ、有らぬものであれ。それ自身の固有の一の反射である一をすべてのものに投げ入れることによって。というのもそれ[摂理]の一は、不可分の一とは同じではないからである。というのも不可分の一は有るものどものうちで最後であり、普遍的な一よりも劣っている。普遍的な一を分有することによって個的なものはそれであるところのものであるが、前者は普遍よりも優れているから一けだし、普遍的な一は何らか一ではあるが一それ自体ではない。というのもそれは一であるばかりか多でもある、それが含んでいるもののもろもろの差異を有している限りは——。しかし摂理の存在がそれに即してあるところのかの一は、普遍的な一のようなものでもない。というのも後者は分割されうるが、前者は本当に一として存在し、また本当に分割されえないからである。それゆえまとめて言うならば、すべてを造ることのできるかの一は、すべてのものを保全することができることとわれわれは主張する。あらゆる実在よりもより真なる存在を、またあらゆる認識よりもより明瞭なる認識を有していて、可知的なものによって分割されることもないし、それらをめぐって動くこともない。というのも魂の認識とまた知性的な認識は、こういった固有な性質を有しているから。というのもじっさいすべての知性は、存在することと知性認識することにおいて一多であるし、すべての魂は動きとしてあるので、動きとともに知性認識するからである。しかるにかのものは、不変であると同時に分割されえないものとして一においてとどまりつつ、同じ仕方ですべてのものを認識する、人間や太陽やこのようなものすべてのみならず、各々一つをも。というのも、存在することにおいてであろうと認識されることにおいてであろうと、何もかの一を逃れないからである。そして言われているように、しかも正しく言われているように、中心が原因であり、円が原因づけられている限り、円全体が中心のうちに中心的にある。そして同じ理由のゆえに、単子のうちにすべての数は単子的にある。しかるにすべてはより大なる仕方では摂理の一においてある、摂理の一が中心や単子がそうであるよりもより大なる仕方である限りは。それゆえ、もし中心が円の認識を有していたとするならば、そのヒュポスタシス（存在）が中心的であるように、またそれ自体が部分のうちに分割されていないように、中心は中心的認識を有していただろう。ちょうどそれと同じように、摂理の一的な認識は、同じ分割されない状態で、分割されたものすべての認識であり、決して分割されないものと最も全体的なものの、それぞれのものの認識である。そして一に即してそれぞれを存立させるように、一に即してそれぞれを認識する。そして認識は認識されるものによって分割されることなく、認識されるものは認識の一なる一性のゆえに混雑することもない。しかるに認識は一なるものとしてありつつ、認識されうるものあらゆる無限性を包括し、それらのうちにあるあらゆる一性を超えて一である。かくして、われわれにとって第一に難問となったことは、以上のような答えを有するだろう。

第2 アポリア

[6] では、よろしければ、第二のさらなるアポリアを取り上げて考察することにしよう。「摂理は偶然的なものを認識する」とわれわれは主張するが、古の人々もこのアポリアの底深さを十分に提示している。じっさい、この底深さゆえに、一方で或る人々は、摂理があらゆるものに及ぶことを承認したうえで、偶然的という本性を諸々の存在者から取り除くに至ったのであり、また

他方で別の人々は、偶然的なものが存立することが明白であることに對して決して異を唱えることはできずに、摂理が偶然的なものに及ぶことを否認するに至ったのである⁶。ところで、両者は正当にも次の前提を承認している。すなわち、摂理は摂理を及ぼすものである限りは摂理が及ぶものを認識していなくてはならず、また、認識するものである限りは、偶然的なものもつ不確かな本性のせいで、不確かな仕方では認識するのであってはならない、という前提である。

とはいえしかし、目下の論述の課題は上述の両方の命題——つまり、摂理があらゆるものに及ぶこと、ならびに、〈偶然的なもの〉というのは単なる名辞ではなく、諸々の存在者の内に存する何らかの本性であること——を証明することにあるのではない。というのも、われわれが課題として企図したのは、摂理が存在し、しかも存在者と呼ばれるあらゆるものを対象とすることを前提としたうえで、そのような問題領域と関わる多くの重大なアポリアを解決することだからである。

[7] さて、これら二つの命題が提示され、しかもわれわれにとって一方〔摂理の存在〕は後者〔摂理の対象としての存在者〕に先立っていることが前提されたところで、われわれは認識について次のことを主張することにしよう。すなわち、認識とは（私の考えでは、あらゆる認識は常に必然的に⁷何らかの認識対象と認識をなしうる者——後者は〔認識の〕主体（a quo）であり、前者は〔認識の〕対象（circa quod）である——の中間にあつて、両者を繋ぐものなのだが）、以下の二つの事態——すなわち、〈認識主体に応じて変化することで、認識主体と同様のものであること〉か、あるいは、〈認識されるものと類似したものであること〉か——のどちらかである。もしくは、これら二つの事態のどちらでもない——つまり、一方よりも他方にいっそう適合するということが全くない。ところで、もし仮に認識が認識対象の内にヒュポスタシス〔ypostasis〕〔存立基盤〕をもつのであったとしたら、認識は認識対象のみによって規定されねばならなかったであろう。また、もし仮に認識が両方〔認識主体と認識対象〕の内に、もしくは両方の外に存立基盤をもつのであったとしたら、認識が両極〔認識主体と認識対象〕のうちのどちらか一方によりいっそう従属することは決してなかったであろう。

しかしながら、認識は認識主体の内に存するのであって、そこから認識対象へと差し向けられるのだから（つまり、認識は一方のもの〔認識主体〕の完成としてあり、他方のもの〔認識対象〕へと向かうことは明白であるから）、認識が認識主体の本性にしがって規定されることは当然であり、或る認識を他の〔認識対象へと向けられた〕諸々の認識⁸と完全な仕方では区別する程度に応じてのみ認識対象と関わる。というのも、認識は認識の目的である認識対象に関してもなにかしかなをもたねばならないのだから。さて、このこと——つまり、認識は認識主体の内に存立しており、認識はその在り方に関して、認識主体の存在様態によって性格づけられること——が示されたのだから、いまや以下のことも明白である。すなわち、不変なる認識主体においては認識もあらゆる点で同様に不変であり、可変なる認識主体の場合はその逆である。また、その実体が非理性的であるような認識主体においては、認識も非理性的であり、他方で、その実体が理性ないしは知性であるような認識主体においては、認識もまた或る種の理性ないしは知性である。また、その存在様態がよりいっそう優れたものであるような認識主体においては、認識もまたよりいっそう優れたものである。

それゆえ、もし仮に摂理のヒュポスタシス〔ypostasis〕がどんな仕方であれ、一から離れて存

在していたとしたら、必然的に摂理の認識も一からいわば遠ざかっていたであろう。しかし、摂理の存立が一なるものにほかならないのであれば、当然ながら摂理は認識しつつの内にとどまり、とどまりつつ自らの固有性にしがって万物を認識するであろう。そして、摂理は認識対象を、たとえそれが多数化されていようと、単一の様態で認識するが、それと同様に、たとえ認識対象が偶然的であろうと、必然的な様態で認識する。総じて、摂理は万物を——認識対象の存在様態ではなく——それ自らの存在様態にしたがって認識するのである。

したがって、認識対象が備えているいかなるものも——可分的であることも、時間とともに生成しうることも、物的であることも、不安定であることも——摂理へと及ぶことはなく、非物的で、非時間的で、不可分で、あらゆる対立を超えた単一の規定が、認識対象の認識に関して、摂理に特性を付与するのである。それというのも、すでに述べたように、認識主体の固有性にしがって認識は規定されるが、[摂理における]認識主体は一性を備えており、不変であり、単一の枠から確固として外れることがないからである。

[8] したがって、もし誰かが「摂理はいかなる仕方でも偶然的なものを認識するのか」と尋ねるならば、そう尋ねる人に対してわれわれは次のように説明するであろう。すなわち、摂理は偶然的なものを認識するのに、偶然的であるという仕方ではなく——じっさい、このことはわれわれの頭を悩ませてきた——、摂理であるという仕方でも認識する。それはつまり、偶然的であるという仕方よりも優れた仕方でも認識することである。じっさい、摂理は偶然的なものを認識する際に、それに対して視線を向けることで、不安定なもの[偶然的なもの]と同じ状態を被ってしまうことはなく、むしろ、摂理は偶然的なもの外に、あらゆる時間に先立って存在するものとして、時間とともに変転するものの認識を獲得したとわれわれは主張する。なぜならば、各々のものをその原因によって認識することは、そのもの自体によって認識することよりも価値があるからであり、また、同属的に認識することよりも、より優れた仕方でも認識することのほうが価値があるからである。

それゆえ、不確定なものを確定的な仕方でも認識するとき、摂理はそれが不確定であることと、摂理のもとにおいて確定的であることの両方を認識している。つまり、摂理のもとにおいて確定的であるということだけでもなく——なぜなら、それだけでは不確定なものを認識したことにならないから——、不確定であるということだけでもないのだ——なぜなら、それだけでは摂理自体の存在様態にしたがって認識したことにならないから。

そのため、[摂理の]認識は、認識主体に由来して確定的なものであることと、もう一方[認識対象]の本性に由来して不確定なものであることの両方を含んでいる。ところで、摂理は、不確定なものについての確定的な認識をもつがゆえに、この全体を認識しているわけだが、その際の不確定性とは現時点における不確定性ではなく未来の不確定性のことであって、[摂理の]認識は不確定なもの原因を先取しているのである。すなわち、摂理は何か不確定なものが生ずることを知っており、その原因を注視することによって、その不確定なものをも認識する。その際、摂理は[自らがそれを]存立させた様態と同様の様態で、不確定なものを認識する。しかるに、摂理は不確定な仕方ではなく、確定的な仕方でも不確定なものを存立させた。したがって、摂理は不確定なものを確定的な仕方でも認識するのであるが、それは、摂理が自らの後にくる延長的なものや物的なものを、非物的な仕方でも非延長的な仕方でも認識するのと同様である。

それはあたかも、種子の内なるロゴス 種子の各々の部分に一つの全体として内在し、やがて自己から〔爾余のものが〕分割される原因を含んでいるロゴス が、自らの後にくるものにとって分割の原因でありながらも、それ自身は不可分であることを自ら認識して、〔ロゴスの〕全体が次のように語る場合と同様である。曰く、「わたしは不可分な仕方でも可分性を保持している。わたしは〔可分性と不可分性の〕いずれからも引き離されることなく、より優れたものの中により劣ったものを包含している。そのため、原因なしに分割が生ずることもなければ、原因の内に分割が先行することもない。そうではなく、分割はそこ〔種子の中〕では原因としてあり、他方で、分割を受容するものにおいては現実の在り方にしたがってあるのだ」と。そしてもし、そのロゴスが自らの内にある分割の原因を探し求めたとすれば、不可分であるにもかかわらず、ロゴス自身も他の基体の内に座を占めていることを見出したであろう。かくして、ロゴスが自らの内ではなく他のものの内に存在することによって、〈分割されること〉、〈他のものの内に生ずること⁹⁾〉、〈各々が至るところに存在するのではないこと〉がそれら〔ロゴスを受容するもの〕に付与されたのである¹⁰⁾。

そして、われわれが「摂理は自らが認識するあらゆるものの原因である」とも語るのは、上述のような意味においてなのである。すなわち、摂理は自らがその原因であるところのものどもを 確定的なものであれ、不確定なものであれ 確定的な仕方でも認識する。また、不確定なものの生成を未来のこととして認識し、確定的なものがいかにして不確定なものに存在への移行を許すことになるのかという原因を認識する。そして、摂理の後にくるものの中には不確定性が存しており、しかも、〔摂理の〕認識によってその不確定性は諸原因に相応しいものとして先取されているのだが、だからといって何ら不可能な事態が起こるわけではない。このことは、いまや明白である

第3 アポリア

[9] これ〔第二アポリア〕に続く第三の問題は、多大な注意をもって考察されるに値する。それは、次のような問題である。もし摂理が確定的なものと不確定なものの原因なら、摂理は両者について同一の点で関わるのか、それとも両者について異なる点で関わるのか。もし同一の点で関わるなら、摂理によって生じるものの中で、或るものは確定的であり、或るものは不確定であることを認識においていかにして見分けることができようか。しかし、もし異なる点で関わるなら、摂理はいかにして存在においてなお一に留まるのか。この場合、摂理の或るものはこのよう〔確定的〕であり、或るものはあのように〔不確定〕であることになるのに。

[10] したがって、われわれはここでわれわれの理性を照らしてくれるように神を呼び求めよう¹¹⁾。神はこれらの問題に関してわれわれが持つ魂の内の「はらみ」を完成させてくれる¹²⁾。われわれはわれわれ自身に向かって次のように言おう。われわれの説は、「摂理は一なるものにおいてある」と言うこと。

実際、共通観念は次のように言う。摂理するものはすべて、摂理の対象に何らか善なるものか善に見えるものを常に伝えと。つまり摂理することは、何について語られるのであっても、善を為すことに他ならない。しかるに、先にも言われたように、善を与えることは、どういう場合

であっても一を与えることだとわれわれは言う。というのも、一なるものは善なるものであり、善なるものは一なるものであるからである¹³。このことはこのとおりで何千回も言われてきたのである。

したがって、われわれは次のように主張する。摂理が一によって特徴づけられると言うのと摂理が善によって特徴づけられると言うことは同じことを言っているのだと。

しかし、先にもわれわれが示唆したように、摂理の一は質料的な一ではない。というのも、質料は非能産的で不毛なものである。なぜなら、質料の後には何もないからである。それに対して、摂理の一は豊穡で最も能産的である。なぜなら、あらゆるものは摂理の後にあるからである。

また、摂理の一は個物の一ではない¹⁴。というのも、個物の一は最終的な分割に到達するのであり、それが一であるのは他の何ものでもないという仕方においてである。しかし摂理の一は、摂理が原因しているすべてのものを含み、それらすべてのものに現前し、それらすべてのものを保持する。

また、こういうことは信じられないかもしれないが、摂理の一は、或る人々が「普遍の一」と呼ぶようなものではない。というのも、普遍の一は、その下に包摂されるものを含み、個々のものに本質を与えるのだが、それが包摂するものの様々な差異を先取しており、本質において「一・多」である。それに対して、摂理の一は、それが産出し完成することができる全てのものから遠ざけられており、あらゆる多様性を受容しえないものであるからである。したがって摂理の一は、いかなるこうしたものとして存在するのでもなく、あらゆる特定の本質を超えたところに位置しているのだが、一にそくしてすべてのものを生み出し、非限定的でいかなるものによっても掌握されないような一なる力を有している。したがって、摂理によって存立するものの中の何か一つであれ全てであれ——各々のものとしてであれ同時に全体としてであれ——摂理の内に先在している力を展開することはできないだろう。また、摂理の内に先在している力をそれら自体の内では捉えたり、それらの内奥で蓄えたり、掌握したりすることもできないだろう。他方、あらゆるものの力は摂理によっていわば「飲み込まれる」。各々のものが生まれつき摂理を愛することができる限りにおいて、あらゆるものは摂理を何らかの仕方でも分有する。

[11] したがって、摂理の一は、あらゆる非物体的・物体的な一性よりも一なるものであり、アピロデュナムム¹⁵ [apirodynamum] つまり力の無限性は、あらゆる無限・有限の力よりも無限である。実際、無限の諸力の中にあつて、或るものが別のものより無限であることは少しも驚くべきことではない。というのも、摂理において量的な無限が指定されることはない。量的な無限においては、無限なものはより無限であるものを有しない¹⁶。しかしながら、すべての無限なものは、その下にあるものにとって無限である。そして、下位のものに対して、力の点で無限である。他方、それ自身の前にあるものにとっては限られたものであり、それらのものによって確定されたものである。さもなければ、より優れたものによって掌握されないならば、支配されることもないことになる。また、より優れたものによって支配されえないならば、それらによって包含されえないだろう。したがって、もし包含されるのであれば、無限ではあるが、所有される。しかし、もし支配され、掌握されるのであれば、支配し掌握するものにとっては無限ではない。そして、あらゆる無限は自分自身にとっても無限ではない。というのも、自分自身にとっても無限なものは、自分自身にとっても掌握不可能であり、したがって、自分自身を包含し、保持することは

できないだろう。存在する各々のものは[自分自身の]力の点で自分自身を保持することができる。したがって、次のように言わざるをえない。各々の無限なものは、自身より後のものに対してのみ無限である¹⁷。

したがって、われわれは摂理の無限な力を次のように理解すべきである。摂理の無限な力は、摂理される対象のすべてが有するすべての力を掌握するものであり、個々のものの本質につりあった一性をすべてのものに付与しもするように、すべての力をその一なる一性にそくして生み出し、各々の力を自分自身の無限において保持する。

実際、〈一〉はどこでも同じではない。例えば、非物的なものと同様に物体において、永遠にある物体と消滅しうる物体において〈一〉は同一ではない。実際、持続しうる物体の一性の方がより大きい。さもなければ、どうしてこれらのもの[持続しうる物体]はバラバラにならずに存続し、他の[可滅的な]物体は一でなくなるのであろうか。さらに、非物的なものの方が一により近い。物体は、無限に進行する分割のゆえに、一から大きく隔たっている。そして、或る一は[別の一]より一であるということは疑いえない。というのも、全てのものは各々、そのもののセイラ [seire] (つまり秩序) の最終地点に到達するまで、[一性を]減じることによって自分自身より前のものとは常に別のものになることをわれわれは見るからである。

[12] このように摂理は一性と無限の力をもつのである。摂理によって産み出され、摂理される全てのものが二つの性格[一性と無限性]を分けもっているのであるが、あるものは「一」にそくして存立し、それらにとっては確定性が親和的である。また、あるものは「無限」にそくして存立し、それらには不確定性が親和的である。ここ[摂理によって産み出されたもの]は、不確定によってなされる、かのところ[摂理]の無限の模倣であり、かのところの[摂理の]一の模倣は確定によってなされる。こうした理由によって、また、この世界に存在するものの中で第一のものは一なる不可変な規定にそくしてあるものである。それに対して、それら[第一のもの]につづくものは、第二の秩序を有しているがゆえにアオリスタイネイ [aoristainei] (つまり不確定への傾向性をもつ)。

しかし、全ての無限は、摂理する無限性にそくして存立し、全ての確定的なものは[摂理の]一性にそくしてある。かのところの無限は、一によって所有され、一に属する。そしてここでは、本性において確定されていないものは確定的なものに仕える。確定的なものは、不確定なしかたで移り行くものあらゆる仕方での変化を秩序づける。ちょうどプロトウルガ [proturga] (つまり第一の能動者) である、これらのものの原因が、自分たちを互いに位置づける秩序にそくしてあるように、第一の能動者に後続するものは、より劣ったものはより優れたものに依存するという仕方、自分自身に比例した状態を受けとり、世界を完成させる。

[13] ところで、われわれの議論は以下の事柄を理解した人々にとってより明らかとなるだろう。すなわち、知性もまた、一方で、産み出すものを両方の形態に産み出すのだが(私はそれらを物体と非物的なものと呼んでいる) 他方で、そのどちらをも認識し産み出すのは、みずから自身の本性にしたがい、非物的な仕方による。そして、ちょうど知性のうちにある非物的なもののロゴスが非物的であり、非物的なものの原因であるように、物体のロゴスは、たとえそれが非物的であるとしても、物体の原因である。前者は産み出されるものをもみずから自身に類同化させ、後者は、知性からの減退に応じて、非物的な形相からしだいに離れていくものを産

み出すのである。

魂もまた、一方で、他の諸々の魂のうちで生き、動くロゴスを生み、他方で、質料のうちに凋落するロゴス¹⁸も生む。前者は知的なものであり、後者は技術的なものである。すべてのロゴスは生に与っているが、そのあるものは生を通して生のほうへ向かい、またあるものは生を通して生なきものへと向かう。

要約して言えば次のようになる。生むものを生むと同時に認識するものはすべて、それらを様々な原因によって生み、そしてより上位の原因にしたがってそれらを認識する。そして、そのもの〔生み出す原因〕から生まれるものうち、あるものはその原因自体にしたがい、あるものは下位の原因にしたがう。

したがってもし、摂理もまた、確定的なものの原因を一によって所有し、不確定的なものの原因を無限によって所有しているが、その両方を確定的に知りそして両者にそくしながら同じ仕方で生むと言われ、ちょうど、知性についてもまた、その非物体的なもののロゴスにそくしても、物体のロゴスにそくしても、非物体的な仕方で生むように、他方で、下位に置かれるものうち、あるものは一に応じて確定されているのであり、またあるものは無限に応じて不確定であると言われるのなら、それは正しく言われることになるだろう。ただし、必然的であるものが無限に関与しなかったり、偶然的であるものが確定に関与しなかったりすることはない。そして実際、後者〔偶然的なもの〕は必然的なものの確定の支配に帰することになり、前者〔必然的なもの〕はその必然的な本性のゆえに永遠的であり、無限の能力に与っているのである。さもなければ、どこから「常にそのようにあり、決して他の仕方でないようなこと」がそれら〔必然的なもの〕にやってくるのだろうか。

けれども、ある場合には、一が支配的になり、そのことによって、一にしたがって生まれてくるものを、いわば無限を有限に結びつけるように、必然的なものにすることがある。またある場合には、無限が支配的になり、それを追いかけて取り押さえる一から外に逃れることによって、一を弱めることがある。しかしながら、摂理はこれらの両方を認識するのであり、われわれが述べているように、たとえそれらの両方を上位のものにしたがって認識するとしても、すなわち、その認識において、生むことに関するそれらのそれぞれの固有の仕方（もしこのように言ってもよければ、一方はペラトポイオン〔peratopoion〕（つまり、確定をつくるもの）、他方はアペイロポイオン〔apeiropoion〕（つまり、無限をつくるもの）とそれらと呼ぼう）をあらかじめ把握するのである。

[14] こうして、非物体的なものにおいても物体においても、あらゆる限定がそこから¹⁹、またあらゆる無限がそこからやって来るのである²⁰。その両者からなるものも、同様にそこから来る。それゆえ単純なものも複合的なものも、その認識はそこにあるのであり、それはちょうど単純なものも複合的なものも、その生成がそこから来るのと同様である。実際一と、一の無限なる力はそこにあるのだから、限定も、いかなる仕方であれ無限なるすべてのものも、別々にそこから生じ来るのである。また、一方は他方に属する——無限の力は一に属する——のだから、ここにおいても一は、それらからなるものが結びつけられるとひとつのシュノロン〔synolon〕（すなわち総体）²¹をつくる。そして一が形づくって、生じるものが必然となるか、あるいは無限が先行してつくって、生じるものが偶然的なものとなるかのどちらかなのである。

しかしここにおいても、無限が一を欠いていることはありえないわけだから、偶有的なものも、先に述べられた通り、必然の本性へと終局するのである。そしてこれ〔偶有的なもの〕は一のほうにより一層支配され、必然へと転換して、事が起こるだいぶ前に確定されるか、あるいは、より微弱に一を分有するため、わずか前にはあるけれども同じことをこうむって確定されるのである。そして移ろう本性からはなれてとどまり、ちょうど先行するものようになり、一の無限である力（それ自身ではなく）を模倣するのである。

というもあらゆる力は、その所有者に属するのであって、それ自身に属するのではないからである。実際、どんな仕方であれ不確定なあらゆるものは、まだ〈あらぬ〉という点で不確定性（それを偶有性と言っている）を有しているが、しかしこれは結局、遅かれ早かれ必然的に〈ある〉か〈あらぬ〉になるのである。そしてそのことは予言が予知的によく示している。というのもそうした予言は、出来事のはるか前になされる場合よりも、少し前になされる場合のほうが、真であると確かめられるからである。あたかも不確定性がすでに転換しているかのように。

[15] もし不確定なものも秩序を分けもっていて、宇宙にたまたま付け加えられたもののようにないなら、われわれより優れたものにおいて、不確定の認識もあるのでなければならぬということ、他のところで示されているけれども、どのようにしてかということだけはまさにいま問われようとしていることである。ではそのことも明らかにならう。実際、もし確定されたものに向かっているこのもの〔不確定性〕と、同じ秩序が生じているものとのあいだに何らかの結びつきがなければ、万物は、一なるものではなくまた知性²²にしたがって支配されることもなかったことだろう。しかしこうした認識をダイモンたちのみに帰す必要がある——実際、彼らはこの世のものに近いにて、それを認識し支配しているように見える——か、あるいは彼ら以前に、神々に帰す必要があるだろう。神々はダイモンたちのそれぞれにも摂理を割り当て、神々自身はそれらのすべてに力を及ぼすからである。

しかし、もしダイモンたちだけに不確定なものの認識と摂理とを任せようとするれば、われわれはこう言うことになるだろう。すなわち彼らは、彼らによって摂理されているものも彼ら自身の前にあるものも、われわれと同じようにそれぞれ個別に認識しているか、あるいは両方を同時に認識しているのだ、と。もし〈個別に〉であれば、われわれの魂といかなる点で違ってくるのだろうか。実際われわれの魂も、予見すること、すなわち、自分自身にかかわると同時に上方のことがらを見すえることはできない。ところで彼らが不確定に関してアオリステノンタス²³〔aoristenontas〕でありつつ（すなわち、不確定に向かい）、みづからを外的なものへと延ばしているとき、彼らは生成するものを追っているとわれわれは認めざるをえないだろう。他方、もし〈同時に〉であれば、今度は、彼らが支配するものについての推論にそくした認識を彼らに与え、彼ら自身のうちに不確定なるものの理念と範型²⁴を残さなければならない。げんにディアノイア〔dianoia〕（すなわち推論）とは、そうしたことの認識なのである。もしくは、その認識が推論に先だって神的に活動する者たちのところにあると述べることによって、その認識をむしろおおいに神々へ帰さなければならない。神的になり、不確定なるものを確定的に予知できるのは、神々からダイモンたちにも、もたらされることであるだろう。実際もしダイモンたちが確定されていないものを不確定的に受けとるなら、われわれは不可変とされているものに固有の非受動性を、彼らから取り去ることになるだろう。というも、そのようなあらゆるものは、現前しないもの

を記憶し、未来の出来事と同化したものを現前しているものや過ぎ去ったものに結びつけるために、表象も感覚も必要とするからである。他方、もしダイモンたちが確定的に受けとるなら、いったいどうしてわれわれは、それをダイモンたちに与えながら、神々自身にも一層そのことを帰さないのだろうか。というのも神々は、時間的なことを無時間的に認識するように不確定なることを確定的に認識するのであり、すなわち認識の様式にしたがって不確定なるものを撰理するのだから。

実際、もし神々が不確定なるものを確定的に認識することができず、ダイモンたちはそれが可能だとすれば、神々からそうした認識が、神々の無能力のゆえにうばわれることになり、おかしなことになる。他方で、もし神々が認識したいと思わないとすれば、それは認識不可能であるときよりも、もっとおかしなことになるだろう。それらの創造者でありながら、創ったものを撰理したくないということになるからである。死すべきものすべて、また創造された個々のもの、そして世界が包摂するありとあらゆるものは、神々のものではないのか。そして唯一の父から創造されるものもあるし、世界の神々から創造されるものもある。しかし神々はこうしたものをつくるに際して、唯一の父の命令にしたがい、唯一の父は神々を通してそれらをも産み出すのである。彼らが神々でありながら、神々が直接的にであれ何か他のものを介在させてであれ、被造物を気にかけていないということは、今も昔も許されざることなのである。

[16] したがってもし神々が不確定的なるものを確定的に撰理したいと思ひ、そうすることが可能でもあるのなら、まちがいに彼らは撰理し、また撰理することによって撰理されるものの価値を認識することになる。そして神々は、超越的にかつみずからの撰理をすべてにいきわたらせつつ、他方でダイモンたちは、神々の監督支配を分けもって、あのかた[プラトン]の言うようにある群れ²⁵を引き受けるものもあれば、他の群れを引き受けるものもあり、「末端にいたるまで分類しつくす」²⁶のであり、あるものは人間を、あるものはライオンを、あるものは他の動物や植物を、さらにより特定のにあるものは目を、あるものは心臓を、あるものは肝臓を監督支配する、といったぐあいなのである。またあらゆるものは「神々に満ちて」²⁷いて、あるものは何も介在させず撰理をし、あるものは先述のごとく、中間のダイモンを通して撰理をする。そしてそのことは、神々があらゆるものに直接的に臨在できないからというよりは、むしろ最下位のものには力がないので最上位のものを自分からは分有できないことによる。

以上については、次のこともまたそれを示している。すなわち、まず、分有するものの中には、時により神々の恩恵を享受するための適合性に欠けるが、ダイモンによるシュナイスタノメノン[synaistanomenon]（つまり、撰理を感覚的に感じ取るもの）がある。だが一方、適合性を具えるようになったものは、神々の臨在を得て直ちに神々に知られているということを知り、自らのうちに降り来たる撰理を受け取る。しかるに、以前には漠然と撰理を分有していて、その恩恵に浴していることに気づかずにいたのである。それはちょうど、太陽の光のなかで眠る人が、光に照らされながらも眠っているゆえにそのことに気づかないのだが、目覚めて、自分が光に包まれているのを知り、そのとき光が自分のもとにあり、知らなかったのでそれに与ることができなかったけれど以前から自分のところにあったのだと考えるのと似ている。やはり同様に、神的なものに向けて転向したそのとき、無確定的なものは確定的となる。神的なものにおいては、無確定的なものも確定されており、分有によってそこから限を受けることにより、無確定的なもの

は存在を得るのである。というのも、転向以前、自らにとっては無確定的にあったが、神的なものにとっては、そのようにではなく、神的なものにふさわしく確定的なしかたであったのであり、一方で、自らの無確定性のゆえに神的なものから脱落したものの²⁸として知られていたのである。もっとも、脱落したとは言え、あらゆる限から逃れていたわけではなく——さもなければ、知らぬ間に非存在の底知れぬ深淵にすべり落ちてしまっていたらう——むしろそれは、全く限に与からないのでもなく、限定のうちにすっきり存在するのでもないという仕方である。しかし、転向後、限定のうちに座を占めるとともに、そこで、自らの無確定性を認識し、その無確定性がそれによって限界づけられているところの、先立つ限を知ることになるのである。

[17] さらには、ちょうど知性的な認識が知性から、あるいは、生と生における動が魂から来たるように——というのも、いかなる仕方であれ生あるものは魂によって生き、知性的に認識するものは知性によって知性的に認識するゆえ——同様に、万物において善は他でもなく摂理から来たるということを認めるならば、善を分有するものは明らかに、いかなるものも——それが、個的な本性を持ち、時々分有するにすぎないものであるとしても——摂理を原因として善を持つだろう。いかなるものについても、各々、系列全体へと到来する存在がそこから発するところの源泉まで遡ることが必要である。したがって、世界の何らかの事物が善に与かっているならば、それは摂理によってこれに与かっているということになる。そしてこれは、永遠的事物についてのみならず、可滅的事物のひとつひとつについてそう言えるのであり、また、確定されたもののみならず、不確定的なものひとつひとつについても、それぞれがその善を直接的に摂理から受け取るにせよ、摂理から善を受けること第一なる存在の仲介を通して享受するにせよ、同様に言えるのである。というのも、存在するものにおける仲介者とは、後続する存在への働きかけの、その先立つ原因を廃棄する仲介者ではなく、先立つものからの恩恵をそれら自らは自然本性的に分有し、これを後続するものに相応しくし、かたや減退によって無能となったものを自分たちの先駆ける輝きによって強めて、分有に適合できるものとなるようこれらをいわば導き、完成するのである。

それゆえにまた、摂理に近いものはいっそうその恩恵を受け、近接性のゆえにいっそうよく整えられるということ、すなわち、魂に関してても知性に関してても、より近いものは、ちょうど太陽の光に関してであればより遠いものよりもいっそう照らされるであろうように、いっそう大きな生命力に満ち、いっそう完成された知性的認識を持つであろうということ、このことをともかくわれわれは認めるし、共通観念もこれに従うところである。というのも、そもそも「近い」とは、近くにあるものとの本性的な近親性のゆえにそう言われるであろうし、逆に、「遠い」とは、遠いといわれるそのものからの存在本性上の遠さに基づいていつもそう言われるのである。それゆえ、与える力を具え実際にも与えるところのものにいっそう近親なるものは、いっそうそれらを分有できるのであり、ゆえにまた、いっそう分有するのである。

[18] 従って、摂理とは他でもなく、すべてのものに善を与えるものでなければならぬとすれば、摂理を分有する度合いが大きいほど、それだけいっそう善に与かり、よく整えられるということになる。そこで、摂理に近接してはいないものも摂理に依存することになるが、もし仲介を通して摂理に依存するものがあるなら、これらはまた摂理に近いものに依存しなければならないということになる。そのため、摂理に近いものは摂理の善に自ら与かるが、仲介を通すものは善

に与かるためにいわば他のものによる介在を必要とすることになる。それというのも、一に対して、もしすべてのものが統合していなければ、世界はけっして一とはならなかったであろうし、他方、もしすべてのものが、万物を整えるものから同じようなしかたで分有をしていたなら、整えられるもののあいだに序列はなかったであろう。それゆえ、——ものを互いに区別し、先なるものと後なるものをつくる——秩序と、——諸々に分かれたものを一なる善へと振り向ける——統合との両者があるとすれば、摂理はすべてに対してあり、しかも、すべてにとって同じようにはないということではなければならない。すなわち、統合という面から摂理はあるけれども、他方で、秩序という面からは必然的に、第一のものどもにあり、第二の、またそれに続くものどもにあるゆえに、すべてに同じではないのである。というのも、真実の告げるところ、またプラトンも言うように、より大きなものを動かすことのできる能力はみな、より小さなものであればいっそう動かすし、より強いものを支配できるものは、より弱いものをいっそう支配するだろう。しかるに、摂理においては、意志が能力に伴うのであるから、より劣ったものにも配慮を施すということが必然である。というのは、神々が能力を持つなら、それが能力を発揮しうる一切のことを欲せずにはいられないからである。われわれにおいても、善い人々は、何であれ為す能力を持つなら、またそれを欲するとみなされているのである。神々においてもやはり、能力が意志を欠くということも、意志が能力を欠くということもありえない。後者の場合、欲することは空しく、前者の場合、能力は不完全となるからである。

[19] しかし、摂理は、第二のものどもにまで関わるとすれば、第一のものどもには必然的なおさらである。摂理が、劣ったものに配慮を施し秩序づけながら、優れたものには分有をさせずにほっておくということは、ありえないからである。それにまた、何も欠くところがないとすれば、この「何も欠くところがない」ということ自体、第一のものどもに自足する能力を与える摂理に負うと言うべきなのである。それゆえ、われわれの共通観念がそう主張すると先に述べたとおり、摂理こそすべての善の原因であると言うとすれば、いかなるものに内在しようとも、自足する能力は摂理から来り、摂理に基づくとしなければならない。それゆえ、もし欠くところがあるのであれば、摂理から充足をあてがわれるし、他のものより先にあてがわれるのであれば、それは存立の近接性に基づくということになる。他方、欠くところがないのであれば、常に欠けるところがあり常に然るべき充足を受け取るものよりも先なるものとして、それらを産出した摂理によって、自足する能力を与えられ、常に充たされているのである。

[20] したがって、先に述べたように、すべてのものは、それら自身の位置に応じて摂理とともにある。永遠的ではなく生成するものについても同様であり、永遠的なものはじかに摂理によって常にあるが、生成するものは永遠的なものを通じて存在を受け取るのである。それは、生成するものの産出と完成のために、摂理が自らの後なるものでそれらよりも先である存在を必要とするからでなく、むしろ、摂理からひどく離れているそれらのものが、摂理を分有するために、摂理が自らに近く産出したものを必要とするからである。しかるに摂理があらゆるところに、かつすべてのもののうちに現存しているのに、すべてのもののうちで善は同じではないとしても、それは驚くべきことではない。というのも実際以下のことは最善の摂理の業だからである。つまり、すべてのものにとって善のメトウシア〔metousia〕（これは分有のことである）があること、その分有は受容するものの価値によって計られること、そして何であれそれが受け取りうるだけ

のものを取ることである。魂と身体のように実体が差異をなそうと——どうのも双方の善は同じではないから。なぜなら存在もまた同じではないのだから——あるいはただ働きだけが生命の価値を構成しようと、そうなのである。それはちょうど、別の仕方でも働く魂は常にそこから別のものを獲得とわれわれが主張するように、である。そして確かにすべてが「その分を」獲得が、受け取るあるものにとっては獲得が容易であるのに対して、あるものにとっては困難を伴う。それらには困難なしに摂理へ向け返られることがなかったからである。

このことは以上のように規定したので、われわれは次のことへと移っていこう。実際、われわれが、最も真なる摂理は、個物にまで及ばなければならないと捉えるのは、次のことを考察することによってであろう。すなわち、すべてのものは全体に何かをなすものになることと、たとえわれわれがどこでも原因を見てとることができるわけではないにしても、その全体のうちに生じるすべてのものの何一つとして付随的なものではないことを、である。そしてまた次のことを考察することによってもそうである。すなわち、どんなものにおいても、石においてさえも、生じるものは摂理に基づいているのが明らかだということをである。しかるに、すべては同様に実在するにもかかわらず、あるものがこのようにあり、あるものがこのようにないとするのは、笑うべきことである。これらのことについてはこれで十分である。

¹ この翻訳は、プロクロス翻訳研究会関西部会によるものである。メンバーは、堀江聡、周藤多紀、大草輝政、讃井太望、岩田直也、高木西子、横道仁志、西村洋平、高橋雅人である。担当箇所は以下の通り（頁数と行数は底本のもの）。はしがきと第一アポリア(1-5節)：高橋雅人、第二アポリア(6-8節)：讃井太望、第三アポリア 9-12節：周藤多紀、同13節：岩田直也、同14-16節(p. 75, l. 16まで)：大草輝政、同16-20節(p. 75, l. 16-p. 79, l. 24)：高木西子、同20節(p. 79, ll. 25-35)：高橋雅人。原稿の最終的なりまとめは、高橋がこれに当たった。

² プラトン『法律』899d以下。

³ プラトン『ティマイオス』30b5以下。

⁴ 論理的には「憂慮すると判断されたからではなくて」となっているべきかもしれない。ギリシア語で否定語が重なるとき、肯定ではなくて否定の強調になることがあるが、それらの否定語をラテン語に直訳するとラテン語では二重否定になり、意味が反対になりうる。そのようなことが翻訳の過程で生じたのかもしれない。

⁵ それ自身によってとはいかなる意味か。ドイツ語訳では、コンマの位置をかえて、*ex se* を帰結の一部としている。それによれば、「もし何かを認識するのであれば、それはそれ自身によってすべてを統一的に認識するだろう」という意味になろう。ギリシア語でもコンマの位置が違い、それによれば「もし何かをすべてを認識するのであれば、そのことからそれは統一的に認識するだろう」という意味になる。

⁶ この教説はペリパトス派およびストア派に帰される。cf. *De providentia et fato*, 63.

⁷ *Sebastocrator* のギリシア語テキストでは、「必然的に (*ἀνάγκη*)」は「以下の二つの事態……のどちらかであるか」に係る。

⁸ *Sebastocrator* のギリシア語テキストには、「他の認識対象へと向けられた諸々の認識 (*τῶν γνώσεων τῶν ἄλλων γνωστῶν*)」と明示的に書かれている。

⁹ *Sebastocrator* のギリシア語テキストでは「他のものになること (*ἄλλοις γίνεσθαι*)」となっている。

¹⁰ 原因の可能態の動的な流出ないしは現実化は、『神学綱要』命題98で精確に描かれている。

¹¹ 困難な問題に取りくむに際して、神をよびもとめるのは、プラトンやプラトニストに常である。例えば、プラトン『ピレボス』25b8-10、『クリティアス』106a3-b7、プロティノス『エネアデス』IV, 9, 4, 6-7、プロクロス『ティマイオス注解』I, 214, 26-216, 1、ボエティウス『哲学の慰め』三巻 pr. 9を参照。

¹² プロクロス『プラトン神学』1, 1でも、問題を解くことが出産に喩えられている。

¹³ プロクロス『プラトン神学』2, 6参照。

-
- ¹⁴ 本書五節で同様の言明がなされていた。
- ¹⁵ ギリシア語 ἀπειροδύναμον をラテン語に音写したもの。
- ¹⁶ こうした「量的無限」の性格は、『プラトン神学』二卷一章で簡潔に論じられている。
- ¹⁷ ここで言及されているような「無限」の相対性は、『神学綱要』命題 93 で簡潔にまとめられている。
- ¹⁸ 種子的ロゴス。
- ¹⁹ すなわち、摂理から。
- ²⁰ 『神学綱要』命題 90 参照。
- ²¹ 第二十二章参照。また『悪の存立論』第三十五章参照。
- ²² 『エネアデス』III, 2, 1, 21-22 参照。
- ²³ ἀορισταίνοντας。
- ²⁴ プラトン『国家』484c7-8。
- ²⁵ プラトン『ポリティコス』275e, 276a, 299d。
- ²⁶ プラトン『法律』903b。
- ²⁷ この金言の祖は、特にアリストテレス『魂について』によってミレトスのタレスにしばしば帰される。プラトン『法律』899b にも見られる。
- ²⁸ 底本原文の transcicens を excidens と読み替える。当該箇所と同様、底本原文二行後の excidens が、セバストクラトールのギリシア語版での相当箇所では、同じ語 ἐκπεσόν であることによる。